校長室だより　おみつ子　思い合いの心で　みんなが笑顔　通信
平成30年10月12日
麻績村立麻績小学校
No.２４

村民運動会

台風の影響が心配された７日（日）。時折の突風があったものの、汗ばむほどの好天に恵まれて、村民運動会が盛大に催されました。

今年から半日開催に変更となりました。「いまどきの子は！！リレー」では、「昔の遊び」として取り組んできた、竹馬・缶ぽっくり・まりつき・棒とばし・縄跳びなどをチームでつなぐリレーに、子どもたちが参加しました。当日欠席の子どもさんもありました。そこで村の種目担当の方がチームの子に相談すると、すぐに誰かがその役割を快く引き受けて複数回出場し、滞ることなくたすきをつないでいきました。低学年の頃から繰り返し取り組んできた成果で、自分の出場種目以外の種目であってもできる自信がもてていることも大きな要因なのでしょう。しかし、代役を気持ちよく受けることができることも、麻績の子のよさであることをあらためて感じました。「昔の遊びの会」の皆さんの支援を受けて、麻績の子どもたちに培ってきていただいたものを発揮できる、とてもよい機会でもあった村民運動会でした。

澄んだ音色を響かせて　北部吹奏楽祭

８日（月）は、金管バンドの皆さんが北部吹奏楽祭に出場しました。北部地区の小学校４校、中学校３校の児童生徒が一堂に会して、お互いの吹奏楽演奏を聴き合うことのできる貴重な機会でした。

麻績小学校は前半の小学生の部、最終演奏でした。ここまでの練習の成果を感じたのは、なんと言ってもその澄んだ音色でした。複数名いるそれぞれのパートが奏でる音色が一つにそろっているからこそ、澄んだ音として響きます。麻績小の演奏はそこが際立っていることが、まず感じられました。そして、それぞれのパートがお互いのパートの演奏を引き立て合っていることも大きなよさでした。「この旋律ではユーフォ（ニウム）を響かせたいから、周りの楽器は控えめにしないと、トランペットみたいに響きがないからね」

という、練習での中島先生の指導を思い出しました。それぞれが思うがまま音を出しているのではなく、周りのパートを意識して聴き合いながらの演奏

であることが、演奏のメリハリになっているのだと感じました。それができるのは、今日までの練習の中で、子どもたちがそのことを意識して演奏できるようになっている、まさに積み重ねの成果であることを感じました。屋内での演奏ということもあり、運動会のパレードとはまた違った、音の響きや重なりを存分に味わわせてもらえる演奏でした。

　後半の中学生の演奏も各校とも素晴らしく、小学生があこがれを持って聴くことができたのではないかと思いました。特に筑北中吹奏楽部の先輩が、今年は東海大会出場を果たしていることからも、素晴らしい演奏に浸ることのできる貴重な機会となりました。北部各校が演奏をとおして交流できる、とてもよい機会に恵まれていることを感じました。

全校音楽「信濃の国」

　『信濃の国』が長野県歌に制定されて５０周年を迎えるのだそうです。

　全校音楽では、６年生がステージに立ち、『信濃の国』を歌ってくれました。次いで、全校でも歌いました。中島先生が、「南北に長い県内の誰もが、仲よくなり、心を一つにして歌うことのできることを願ってできたのがこの歌です」と紹介してくださいました。他県で長野県人会などが催されると会の終わりに『信濃の国』が必ず歌われて、県歌など持たない他県の方から驚かれたり不思議がられたりするという、「長野県人あるある」エピソードを耳にしたこともあります。でも、子どもたちにとっては、県内の山河や地名、著名人が盛り込まれた、生涯にわたり歌う機会の多い歌です。この機会に、ぜひ（６番まで全てとは言いませんが）親しみ、歌えるようになってほしいと思いました。